

一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の

## 最後の木造橋梁「日本橋」の石標をめぐって

——歩きながら調べる歴史学習方法論の一駒——

小山田和夫

### はじめに

幕末以降の時代における歴史研究に志した場合、現存する写真資料が極めて重要な意味を持っていることは、近年数多く説かれるようになって来たところである。

東京都建設局道路建設部道路橋梁課編『東京の橋と景観』（〈東京都情報連絡室情報公開部都民情報課、一九八七年十二月〉一四五ページ「日本橋川」）の中に、「江戸期の日本橋」「旧日本橋（M6）」「日本橋（M44）の現在（撮影S59）」という題名の単色図版が三点収録されている（引用者注、Mは明治、Sは昭和を示すものようであるが、明治6、昭和59と記した方が、理解しやすいことは言うまでもない）。この単色図版三点のうち、写真版である二点の図版は、過去のある場所とその後について、同一の場所より撮影を行う方法、すなわち定点撮影を行ったものではないものの、日本橋の江戸時代の一時期の姿、一八七三（明治六）年癸酉五月三十一日に竣工したその姿、そして、現在もほとんど変わらない一九一一（明治四十四）年辛亥三月竣工の姿を伝える三点の単色図版を見ることによって、橋の変化する様子を窺うことが出来る。

これらに、野沢寛編『写真・東京の今昔』（再建社、一九五五年七月）この書物は写真版がほとんどであるため、ページ数は入っていない）に収められている単色図版を加え、そして、それぞれに付された簡潔明瞭な図版解説を読むことによって、最後の木造の架橋工事が行われた日本橋の姿が蘇って来る。すなわち、「明治四年頃の日本橋で、安政六年四月三十日改架されたもの。明治六年五月三十一日に改架された以前の日本橋の姿で、現在までほとんど未発表に過されてきた貴重な写真である。英人撮影」（明治十年頃の日本橋。橋上の路を三条に分って車道と人道を区別し、欄干などに青ペンキを塗ったり、当時としては充分西洋風であった。鉄道馬車はまだないが、ガス燈はついている。橋南の高札場や唐傘の露天商などの姿に、江戸情趣が伺われる）（鉄道馬車開通直後の写真で、明治十五年頃の日本橋。下岡蓮杖の撮影）（明治三十年代の日本橋。日露役前のものである）（日露役凱旋の奉祝門が橋際にあり、電車は日の丸の小旗を掲げている。明治三十八年、橋の北岸（室町）から白木屋方面を望む）（日本橋改修工事は、明治三十九年に着工して、六年かかり明治四十四年に竣工している。これは明治四十二年三月二十八日の撮影である）（日本橋魚市場。大正十二年、震災後築地へ移った。俗に魚河岸という）（寛都三十年祝典に際し日本橋の両側に杉葉大鳥居を建てたが、これは安芸厳島の鳥居を模造したものである）（明治三十八年頃の日本橋で、改架工事着手直前のもの）（明治四十四年四月三日の日本橋開通式。当日は神武天皇祭でもあったが、あいにくと雨降りであった。しかし日本一の豪華な橋を見ようとする群集で両側は埋められた）（震災後復興せる、昭和四年頃の日本橋）とあるのがそれである。

そして、出版当時、一九五五（昭和三十乙未）年七月以前の姿を伝える単色図版、「日本橋魚市場記念碑。日本橋魚河岸の昔を偲ぶ碑で、魚商人の寄金によって建立。台石に久保田万太郎氏の碑文を刻み、その上に海の女王乙姫の像を立てている。江戸っ子らしい奇抜な着想である」（東京市道路元標という文字が中央に刻まれているが、これは日本橋上の中央に立ち、全国里標としてある。昔は橋の袂を基点として一里塚が立てられていたわけである）（現在の日本橋。

新ビルが続々と立ち、三越の正面がかくれてしまった」と言う内容の単色図版を見ることで、日本橋の三つ時期、すなわち、安政六（一八五八）年戊午四月三十日に改架した姿、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した姿、そして、現在もほとんど変わらない日本橋、一九一一（明治四十四辛亥）年三月に竣工した姿を知ることが出来るのである（鉄道馬車開通直後の写真で、明治十五年頃の日本橋。下岡蓮杖の撮影）と題された写真版は、小西四郎編集委員代表『写真図説』日本百年の記録』第一巻・近代の開幕（講談社、一九六〇年十一月）一六七ページ単色図版（日本橋をわたる鉄道馬車汐入りの川が磯の香をよせて どんこ道をひろう人かげもまばら）と題した写真版と同様である）。

日本橋の創架については、その正確な架橋時期を示す記録を欠いているものの、一般には、三浦浄心著『慶長見聞集』巻の五・「日本橋市をなす事」に、「日本橋は慶長八癸卯の年、江戸の町わりの時分新儀出来たり、其後此橋御再興は元和四年戊午の年也」と記されているとおり、慶長八（一六〇三）年癸卯に創架された橋であると考えられている（江戸叢書刊行会編纂『江戸叢書』巻の貳（日本図書センター復刻、一九八〇年二月）一一六ページ。社団法人土木学会編『明治以前』日本土木史）（岩波書店、一九三六年六月初版。一九九四年一月第四刷使用）第四編「道路・橋梁・渡場・関所」第五章「橋梁」一一〇六〜九ページ「日本橋」。

こうした日本橋の架橋などのように、史料が整い、かつまたこれまでの研究成果が豊富にある場合は、堅実な学者によって記された書物などをひもとくことで、十分な知識を得ることが出来るため、さかのぼって、これまでの研究史を調べ、それぞれが依拠した諸史料に再検討を加え、記述された内容の再確認を行い、万一相違する場合には、そこから、新たな事実を導き出すという作業を省略することが多いのが現実である。

しかしながら、先学諸賢の論著や一般書などをひもとくと、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した最後の木造の橋梁である日本橋については、ほとんど記されることなく、また、その基礎的な史料を見て記したとは思えないものもままあることに驚かされる。一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の橋は、日本橋の歴史上、最後の

木造の橋梁であり、それまでの反りのある橋から平行な橋へと変化を遂げていること、すなわち、橋の下を船舶が航行する水上交通中心の時代から、陸上交通中心の時代へと移り変わりつつある時期に架橋されたもので、その後、わが国最初の市街馬車鉄道の線路が敷設されるなど、変貌を遂げつつある時代の姿を如実に物語っており、幕末から明治にかけての歴史の一駒を垣間見ることが出来るのである。

現在の石造の橋梁である日本橋については、その橋の袂にある「日本橋由來記」<sup>(2)</sup>(昭和十一年四月、日本橋區)の記事、すなわち、「日本橋ハ江戸名所ノ随一ニシテ其名四方ニ高シ(中略)明治聖代ニ至リ百般ノ文物日々新ナルニ伴ヒ本橋亦明治四十四年三月新装成リ今日ニ至ル茲ニ橋畔ニ碑ヲ建テ由來ヲ刻シ以テ後世ニ傳フ」と記されている碑文を見ることで、その歴史的な事柄については、ほぼ満足が行く知識を得ることが出来る。

しかしながらその碑文に一行も触れられていないのが、一八七三(明治六癸酉)年五月三十一日竣工の日本橋であり、〔新聞集成〕明治編年史編纂会・中山泰昌編著『〔新聞集成〕明治編年史』第一卷・維新大変革期(〔新聞集成〕明治編年史頒布会、一九三四年十二月初版。一九六五年九月再版使用)「明治五年壬申十一月」五〇七ページ「日本橋を西洋風に架け換へ」(一一・一、新聞雑誌六七)単色図版(昔の日本橋(錦絵))に、「府下日本橋今般西洋風ニ換架相ナリ、其容チハ幅広クシ、中ニ二条ノ欄ヲ設ケ、三道トナシ、中道ハ馬車、人力車ヲ通ジ、左右ノ兩道ハ往来人ヲ通ズベキノ挙ナリト、其他江戸橋、柳橋等ノ諸橋モ追々換架相ナル由」とあり、斎藤月岑著・金子光晴校訂『〔増訂〕武江年表』明治六年癸酉条に、「五月、日本橋御改造成就す(西洋風を以て、中に車馬道、左右に人道御取設あり)」と見え(〔増訂〕武江年表)2(平凡社・東洋文庫、一九六八年七月)二五七ページ)、東京都中央区京橋図書館編刊『中央区年表』明治文化篇(一九六六年三月)二二二ページ「明治五年・一八七二条」二五七ページ「明治五年・一八七三条」に、「(明治五年)十一月二十七日、日本橋改架工事に着手」(明治六年)五月三十一日、日本橋の架け換成る。木造で反りはなく、擬宝珠は廃され、男柱と袖は石造、それに人道と車道を分ける欄干が設け

られた。工事費はいわゆる七分積金により、木材は精良な樺を用いたので、この後三〇年にわたる久しい歳月に堪えた」と記されている正確な記事を読むことにより、史実とその橋の姿を窺うことができよう（東京都総務局総務部東京都公文書館百年史編集係編刊『東京百年史』別巻・年表索引（一九七九年一月）「一八七三・明治五年」条に、日本橋改架工事開始のことは見えないものの、「一八七三・明治六年」条には、「五月三十一日、日本橋改架完了」と記されている）。

一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の日本橋とは、どのような経緯で架橋されたものなのであろうかという素朴な疑問を解消するため、日本橋の創架から現在の橋に至るまでの歴史を調べながら過ごした一九八〇年代前半の思い出を蘇らせながら、それから二十年という歳月を経た二〇〇〇（平成十二庚辰）年八月十五日、終戦の日に、数年振りで、日本橋とその界隈を訪れた。その後時間をかけ、私自身「歩きながら調べる、そして、調べながら、再度歩いて見る」という歴史学習方法を展開した。その一例として、日本橋の架橋の歴史上最後となった木造架橋、すなわち、明治五（一八七二）年壬申十一月二十七日に着手し、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した橋、その基本的な史料の一つである「石標」について取り上げて見ることにした。

この時期は、それまでの天保暦すなわち太陰暦を用いてきたわが国が、欧米諸国に合わせることを目的として、明治五（一八七二）年壬申十一月九日、太陰暦を廃して太陽暦を採用するとの詔書が発せられ、明治五年壬申十二月三日をもって、一八七三（明治六）年癸酉一月一日とし、<sup>③</sup>また明治五（一八七二）年壬申十一月十五日には、神武天皇即位の年をもって紀元とし、即位日一月二十九日を祝日とすることを決定した時でもある。

以下、明治五（一八七二）年壬申十一月二十七日改架工事に着手し、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋に触れている史料、そして、その時期とそれ程隔たりのない時期に著された書物や写真版を見ることを通し、当時の橋の様子をうかがうことにしよう（なお、初めて歴史的な事柄について調べる学生諸君のために、調べる方法についての記述を行っ

ていることを予めお断りしておく。

## 第一節 一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の木造「日本橋」架橋を示す史料について

【史料の存在を知るために】

日本橋のある東京都中央区は、東京都二三区<sup>(4)</sup>のほぼ中央、武蔵野台地東端に位置する山の手台地の東縁から東へと広がる平坦な東京低地の中にあり、一九四七（昭和二十二年）三月十五日、旧日本橋区ならびに旧京橋区の地を併せ、新たに成立した（東京都中央区役所編刊『中央区史』上巻（一九五八年十二月）第一編「序説」第一章「中央区とその自然」）。

行政の中心である東京都中央区役所は、早い時期より区史の編纂にも着手した。例えば、東京都中央区役所編刊『中央区史』中巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ」第一章「市街とその変遷」第六節「両国・日本橋・人形町・その他」一九五〇八ページ「日本橋界限」単色図版（日本橋の道路元標）（明治初年の日本橋）（木原店の食傷新道（東京風俗志）（通町の畳蚊帳問屋、近江屋西川商店（同店所蔵）（洋書肆、丸善書店（東京博覧絵による）（品川町の町角（明治四十三年ころ））他）において、「日本橋は繁華の中心であるばかりでなく、活気が満ちあふれている街として、東京のどんなところでもこれに及ぶものはなかった。いうまでもなく、その活気は、日本橋に続く魚市場<sup>(5)</sup>から湧いてきたものであった」と記し、江戸時代から明治時代にかけての日本橋界限の持つ都市的な繁栄の状況について掌握することから始めた記述を行い、都市史研究への先駆的な面も見出だし得る区史を早くに刊行した<sup>(6)</sup>ことでも、注目されよう。

そして、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の日本橋についても、東京都中央区役所編刊『中央区史』下巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ（続き）」第九章「交通」第四節「橋梁」（三八八〜九一ページ「日本橋」）単色図版（日本橋の変遷

（明治六年改架の木橋）（同上（現在））（同上（現在））において、「日本橋は明治五年から六年にかけて改架され、その後明治四十四年にいたり大々的に改架されたが、その橋が大震災および戦災にもよくたえ、多少の改修が行われながらも今日にいたっている。明治六年の改架の橋は、橋長二十八間、幅六間で、橋材は精良な如鱗質の槻を用いた。また橋畔の南北に『日本橋』と刻んだ高さおよそ五尺あまり、幅一尺一寸五分、四面の石標を建てたが、これは萩原秋巖の揮毫、広瀬郡鶴の鐫刻にかゝり、南橋畔の石標の裏面には、「明治五年十一月二十七日創工、至六年五月三十一日成、資皆出於會議所蓄積」とあつた。すなわちこの改架は宮繕會議所（のちに「東京會議所」と改称）によつてなされたものであつて、費用はいわゆる七分積金<sup>(7)</sup>によつたものであることがうかがえる。この橋は交通量が激増し、かつ中央の電車路線も交通頻繁となり、幅員の狹隘を感じるに至り、実用的にも不備になつた。それに加えて、開府以来その名が日本の中心として知られてきたが、その名のあまりに名高いわりに貧弱さは免れなかつた。そこで市会の決議にもとづき、最初は三十九年度から起工し、四十一年度までに竣工する予定であつたが、種々の事故を生じ、四十一年十二月十五日起工することになり、四十四年三月三十一日に竣工をみた。ここに名実そなわつて、日本橋の水はロンドンに通ず、といわれるに相応しいルネッサンス式の日本橋が誕生したのである。（下略）」といった記述を行っている（引用者注、広瀬郡鶴は、広瀬群鶴の誤植である）。

この記述によつて、明治五（一八七二）年壬申十一月二十七日に日本橋改架工事に着手し、一八七三（明治六）年癸酉五月三十一日に竣工した日本橋に関する史料として、造橋された際に付された「石標」があつたことが知られよう。

#### 【「東京市史稿」】

「石標」など、日本橋の架橋に関連する史料の存在を知るため、東京市から東京都へと継承されている修史事業の成果である詳細な『東京市史稿』をひもとくことにする。

橋梁に関しては、東京市役所編纂・刊『東京市史稿』橋梁篇第一（東京市地史各記七、橋梁史第一。一九三六年十一月）同第二（東京市地史各記七、橋梁史第二。一九三九年十月）が公刊され、日本橋の創架から安永三年甲午の日本橋改架に至る史料が収集整理されているものの、その後については未刊であるため、次に、東京都編・刊『同上』市街篇五十四（東京市地史各記二、市街史第五十四。一九六三年十月）九四七～五〇ページ）明治六年五月三十一日条をひもとくにしよう。そこには、「三十一日（明治六年、西暦一八七三年、五月）。昨年十一月ヨリ工事中ノ日本橋改架竣工ス（東京開化繁昌誌）」という綱文を立て、「日本橋改架竣工」 「日本橋改架竣工事蹟」として、『東京開化繁昌誌』（明治文化全集第十九卷所収）の記事を引いているのを見出だすことが出来よう。

【引かれた典籍の確認】

右に示された出典『東京開化繁昌誌』が収められている「明治文化全集第十九卷」とは、永原慶二監修『岩波』日本史辞典』（岩波書店、一九九九年十月）一三三ページ）にも、「吉野作造・尾佐竹猛らの明治文化研究会（一九二四年十一月設立）編集の史料叢書。初版二四卷（二七―三〇）と改版一六卷（五五―五九）を合わせ増補した第三版三二卷（六七―七四）がある。今日稀覯の明治前期の刊行文献を中心に蒐集選択された明治史研究全般にわたる史料の宝庫で、各巻に解題と文献年表などを付す（下略）」と記されているとおりのものである。この記述を手掛かりとして、その第十九卷・風俗篇を見て行くと、一九二八（昭和三年）年二月、日本評論社より出版されたものであることが知られ、図書館のカードより、現在は、明治文化研究会編『明治文化全集』第二十卷・風俗篇（日本評論社、一九九二年十月復刻版第一刷）という新たに編集したものが出版されていることも知ることができた。

そこで、この新たな第二十卷・風俗篇をひもとくと、萩原乙彦著『東京開化繁昌誌』と高見澤茂著『東京開化繁昌誌』というように、同一名称の二冊の書物が収められており、最初に、巻頭に収められている石川巖氏の手になる両



書の解題から見て行くことにする。

石川巖「萩原乙彦著『東京開化繁昌誌』解題」(二〇〇二ページ)によると、寺門静軒の『江戸繁昌記』に倣って作成した東京の繁昌記が多いことから、両書の出版の前後関係などについて記述されており、そして、「本書初編は、明治七年二月中旬発行者万青堂主人に請はるまゝ草稿を渡し、その年六月上旬に発行の運びに至つたとの事である。その時偶然か故意か、一時に同種類が三本も出たのには、著者も驚いたと見え、下の如く言つて居る。(中略)初篇には日本橋三条の往来、日本橋魚市、日本橋電信局、国立銀行、鎧橋、新富座、守田座、牛店、乳牛、娼妓解放、馬車人力車等。第二編には上野東照宮、万世橋、柳原、和泉橋、美倉橋、浅草橋、柳橋、書画会、人品四等、風俗一様等が二編四冊の内容であるが、これ丈では開化繁昌の或る一部分にしか過ぎないので、尚ほ三編を出す計算で巻末にその細目を挙げながら、遂に上木を見るに至らなかつたらしい。その余白口上に関根只誠翁も、本書編纂を手伝つたことが見えて居るのは、注意すべきである。本書の特色は故事来歴沿革の細叙にあるが、単に開化繁昌記といふ上からは却つて無くもがなで、それよりは寧ろ当代の世相や風俗を細写して欲しかつた。その点大に高見澤の繁昌誌が数等優れてゐるやうである」とあり、萩原乙彦著・三木光齋画『(東京)開化繁昌誌』初編(万青堂)は、最後の木橋となつた日本橋が竣工した一八七三(明治六癸酉)年五月三十一日の翌年、すなわち、一八七四(明治七甲戌)年三月官許、同年六月上旬に出版された書物であることが知られ、この出版年の早いものより見て行くことにした。

萩原乙彦著・三木光齋画『(東京)開化繁昌誌』初篇冒頭には、出版当時の日本橋の姿を示す画が図版として収められており、この絵によって、一八七三(明治六癸酉)年五月三十一日に竣工した木造の橋梁の様子をうかがうことが出来るはずである。と思いきや、「はじめに」に記した写真図版と比較して見ると、描かれている日本橋の姿が反り橋となっており、写真図版からうかがえる橋の姿は、どう見ても平たい橋であり、忠実な描写でないことが判明する。

この絵の橋には、最後の木造の日本橋の特徴の一つである車道と人道とが、欄干によって分離している様子が窺え、それは写真図版と同じである。以上の点より、この絵の橋は、江戸時代からの伝統的な反り橋の姿をした日本橋を念頭に入れて描きながら、新たに架橋された当時の様子を加味したものと推定されよう。

萩原乙彦著・三木光斎画『(東京)開化繁昌誌』第一編(上之巻)「日本橋三条往来」の本文には、

(上略) 疇昔きのふの旧弊今鳥の維新、掛更りたる美麗壯觀、橋上の路三条に分ちて、中央は車馬の往来、歩して河南へ行く者は、其東の条に倚り、歩して河北へ行くものは、其西の条に倚る。但し見る組入の一新橋、桁梁柱あた他し木なく、揮て椶の如鱗木質にて、得難かるべき良材なるを、惜むらくは青ペンキもて塗抹したれば、木質糲糊とし、婦女子は知らで過なん。橋詰の両辺に標石建てり、高さ凡そ五尺許、幅一尺一寸五分四面、縮図則ち左のごとし。

石面せきめん 日本橋

石背せきはひ 紀元二千五百三十三年五月三十一日成

是河北これかほく尔建たつる所の標石へうせきなり

石面せきめん 日本橋

石背せきはひ 明治五年十一月二十七日創／工至六年五月三十一日成貳／皆出於會議所蓄積(引用者注、フは改行を示す)

是河南これかなん尔建たつる所の標石へうせきなり

右標石之縮臨 秋巖門人 小室樵山(印)

件の標石両基とも、家父秋巖の揮毫にして、石工、広群鶴之を鑄ある。盛大斯のごときは宜なり。稚兒輩が双陸に、振出しといふのみならず、此地乃ち文明開化ふりだしの開発と謂つべし。

因みにいふ、広群鶴は方今石工中の高手、且名家なり。其先某、齋藤実盛の苗裔、江戸開府の始、向島なる〔墨田川の東畔を俗總て向島といふ。〕蓮華寺と共に、鎌倉より移住す。其孫右衛門に至りて、元文年間、谷中故の善光寺門前町に、家居せしより、茲に五世依然として地を離れず、工業を襲て安居せり。其略系を左に挙。

（中略）五代目今の群鶴〔群燕ノ弟子、后養子トナリテ家督シ、工業歴代ニ秀出セリ。〕有此旧家なりけるも、当時偶尋門する人、広瀬群鶴と称へては、近隣にても知るものなし。只に石屋の喜右衛門ならでは、其地を管る家主まで、知らず顔して過す者は、元来平民なる故に、氏は称ふべくもあらず、群鶴は私号にして、公然とは称へ難かりしを、御一新の時に遇て、苗字も号も公然にとなへらるゝに至りては、対ふ鄰は勿論にて、朝夕通ふ納豆売、炭うる男、糊うり婆、菜行屠鱗児酒屋の丁稚、花行水行油うり、鍋釜鑄かけ雪踏なほし、盲人按摩針までも、群鶴の名を問ば、那処の石店とさし示すは、即ち開化の余沢ならずや。

と記されている。この書物は、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋の「石標」の模写を挿入した貴重な文献であり、そして、架橋当時の日本橋の様子を伝える記録的な要素を含んだものと判断されよう。

本文の中に見える「歩いて河南へ行く者は、其東の条に倚り、歩いて河北へ行くものは、其西の条に倚る」という部分は、歩行者の通行が左側通行であったことを物語っており、この点については、既に、石井研堂著『明治事物起原』第九編「交通部」（一九四四年十一月・十二月増補改訂版を底本とした筑摩書房・ちくま学芸文庫5（一九九七年九月）による。「街道の清新」九「道路は左側通行」（六一―三ページ）が指摘するように、これが文書（引用者注、文献）に見える初見ではあるものの、「しかれども、これ官令にはあらず、左側通行の警察令は多けれども、みな車馬に対する法令のみにて、歩行人に対してのものは、いまだ一見せず。（下略。以下、右側通行の件について論述する）」と言うように、歩行者に関する法令が発せられてはいないのも事実である（馬車に関しては、東京都編・刊『東京市史稿』市街篇第五十二（一九六二年三月）明治五年壬申三月条、

〔附記〕馬車規則（九六一―二ページ）。（明治五年）東京府布達類〕の中において、馬車と馬車とが行き交う場合には、左に寄せることを規定している<sup>(8)</sup>。最初にこの文献を見た印象は、先に絵の箇所を示したものの、記述された部分を見ると、新たに架橋された日本橋の規模については、一切示されていないことにも気が付いた。

右に示した萩原乙彦著・三木光斎画『（東京）開化繁昌誌』第一編（上之巻）「日本橋三条往来」に見える日本橋の「石標」は、架橋後間もない時期に模写したものを翻刻したものであり、その史料的な価値は認めるものの、「石標」の写真版、あるいは「石標」の拓本が存在するならば、模写以上の史料的な価値があることは言うまでもない。

そこで次に、「石標」の写真版や拓本が収録されている文献を求めることにしよう。

【一八七三（明治六）年癸酉五月三十一日に竣工した日本橋の石標の写真・拓本】

一八七三（明治六）年癸酉五月三十一日に竣工した日本橋は、その後、新たな石造の橋に替わっていること、そして、たとえその「石標」が存在していたとしても、その後発生した関東大震災、あるいは太平洋戦争の戦災を被った地域であることを考えるならば、現存しない可能性は極めて高い。

それでもなお、写真版や拓本などを探し出したいというのが、日本史学に志した者すべてに共通する思いであろう。その方法としては、まず、木造の日本橋が架けられた一八七三（明治六癸酉）年五月より、次の石造架橋工事が行われた日本橋に替わるまでの間に出版された書物などをすべてひもといて行くことから始めねばならない。

まず現在の中央区が成立する以前、すなわち、日本橋区と京橋区において、区史が出版されているか否かを調べてみると、幸いなことに、両区ともそれぞれ区史を編纂していることが判明した。そこで、今必要なことに関しては、東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』第一冊（一九一六年九月）第二章「河川橋梁」第二節「橋梁」の復刻版『日本橋区史』第一冊（飯塚書房、一九八三年七月。第一冊目次正誤、第一冊本文正誤を付す。四九〇五五ページ「日本橋」）の中に、「明治五年架

換の橋」という項目があり、それを見ることにする。すなわち、「明治五年架換の橋は、架設費額金一万二千九百六十七円二十一錢二厘（此の内金壹千貳円貳錢八厘府税支払）長さ二十八間、幅六間、橋坪百六十八坪なり。橋畔の南北に建てられし『日本ばし』と題する石標は、高さ五尺余、萩原秋巖の揮毫、広瀬群鶴の鐫刻したるものにして、其の裏面には『明治五年十二月二十七日創立至六年五月三十一日成貨皆出於会所所蓄積』とあり。同橋の材料たる木材は、精良なる如鱗質の槻を用ひたり。其の後修繕相次ぎ、馬車鉄道・電車鉄道を乗せて三十有余年の久しきに耐えたり（下略）」（五一―二ページ）という記述を見出すことが出来た。

さらに、東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』参考画帖第一冊（一九一六年九月）第一輯「本文各章参考画」第二輯「御府内往還其外沿革図書日本橋之部」を二分冊した復刻版『日本橋区史参考画帖』第一輯（第一輯第二「橋梁及名所古蹟」一七ページ単色図版（現在の日本橋）（維新後の日本橋〈其一・其二〉）第四「名所古蹟及風俗」三五―ページ単色図版（最古の日本橋〈海道名所絵巻、子爵秋元興朝氏蔵〉）〔寛文中の日本橋〈二百五十年余年前、江戸名所記所載〉〕〔延宝年中の日本橋〈二百四十余年前、江戸雀所載〉〕〔広重の日本橋〕〔寛政頃の日本橋〈百二十余年前、江戸名所図会所載〉〕〔広重の日本橋〈東海道五拾三次之内〉〕〔天保前後の日本橋〈東都歳時記所載〉〕〔広重の日本橋〕〔北斎の日本橋〕〔豊国の日本橋〕〔日本橋に関するもの〈其一〉〕〔日本橋に関するもの〈其二〉〕〔日本橋に関するもの〈其三〉〕〔日本橋に関するもの〈其四〉〕の中に、「日本橋に関するもの（其四）」として、単色図版〔明治七年の日本橋〕〔明治六年の題字〕〔現在の題字（故公爵徳川慶喜筆）〕という名称が付された図版が収録されていることも見出だした。

最初の単色図版〔明治七年の日本橋〕とは、萩原乙彦著・三木光齋画『東京』開化繁昌誌』第一編（上之巻）の中に見えた絵〔日本橋〕であり、次の〔明治六年の題字〕四点が、今知りたいと願っていた石標の四面の文字である。復刻版では、二番目と四番目に配された単色図版より、「日本橋」という文字が辛うじて判読されるものの、その他の二点の単色図版は、粗悪な復刻版の書物であるため、全く判読することが出来ない。

そこで、復刻版ではない初版本を所蔵している図書館を探し、それが、東京都中央区立京橋図書館（中央区築地一丁目一の一）に所蔵されていることが判明したため、同図書館へ赴き、所蔵する東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』参考画帖第一冊（一九一六年九月五〇ページ）を閲覧することにした。（明治六年の題字）のうち、最初のものには、「明治五年（下略。判読不可能）」という文字が、三行にわたり記されていること、次に楷書で「日本橋」、三番目に「紀元（下略。判読不可能）」、最後に隷書で「日本橋」と記されていることが判明した。

これらの単色図版四点すべてが判読できれば、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した木造の日本橋に付された「石標」の文字をそのまま伝える写真版であり、史料的には第一番目に位置付けられることになるものの、残念ながら図版が小さく、文字が刻まれていることを示すに留まり、それ以上は判読不可能な部分があるため、別に、「石標」の文字を撮影したものの、あるいはその拓本を収めた書物を求める必要が生じた。

『日本橋区史参考画帖』第一冊より早く、その写真版、あるいは拓本の影印を収録した書物には、最初の石造の橋が竣工した一九一一（明治四十四辛亥）年という時期に、日本橋架橋を記念して出版された二冊があることが分かり、いずれも、東京都中央区立京橋図書館が所蔵し、その郷土資料室に保管されている（一冊の中に落丁部分が二箇所あるのは残念である）。

すなわち、その第一番目の書物は、安藤安（玉堂）編輯『日本橋紀年誌』（〈東京市神田区・日本橋紀年誌発行所、一九一一年四月〉巻頭単色写真図版（旧日本橋の文字））であり、第二番目のそれは、東京印刷株式会社編輯（編修）『（開橋記念）日本橋志』（〈東京印刷株式会社、一九二二年三月〉巻頭単色図版（明治六年開通したる日本橋南北の橋詰に立てられたる標石の文字なり、石標の高さ五尺余、幅一尺一寸五分四面なり、書は小室秋巖の揮毫にして石工広瀬群鶴の鐫る所なり））である。

前者『日本橋紀年誌』には、巻頭に阿部浩東京府知事の序があり、小田厚太郎編纂主任の例言によれば、新日本橋

架換工事の竣成を機に、江戸草創以来数百年にわたる日本橋の歴史的沿革とともに、新日本橋架橋に関する事実を記録し、後世に伝えることを目的として編まれたものであることが知られる。その口絵として、「旧日本橋の文字」という単色図版が収録されており、この「石標」の写真図版により、「石標」の文字を正確に判読することが可能となった。すなわち、日本橋の北側に置かれていた石標には、石面表に、隸書で「日本橋」、その裏面に、同じく隸書で「紀元二千五百二十三年五月三十一日成」と記され、その南側に置かれていた石標には、石面表に、楷書で「日本橋」と記され、その裏面に「明治五年十一月二十七日創／工至六年五月三十一日成貨／皆出於會議所蓄積」と記されていることが判明した（〽は改行を示す。また、以上の「石標」の位置については、萩原乙彦著・三木光斎画『東京開化繁昌誌』第一編（上之巻）の模写に添えられている記述に基づいて判断した）。

後者『開橋記念 日本橋志』は、その例言より、新たに架橋された石造の日本橋、その開通の祝意を表すことを目的として、日本橋の区民有志が組織した日本橋開橋祝賀会が、開橋と祝賀会とを記念して出版したものである。この書物の巻頭に収められた幾多の単色図版の中に、「東京開化繁昌誌」所載明治七年頃の日本橋（「東京開化繁昌誌」所載日本橋通り（明治七年頃）（明治六年開通したる日本橋南北に立てられたる文字なり、石標の高さ五尺余、幅一尺一寸五分四面なり、書は小室秋巖の揮毫にして石工広群鶴の鐫る所なり）（鉄道馬車往復時代の日本橋南詰）（改築前の日本橋）と言った一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋に関するものが収録されている（明治時代の出版ではないものの、日本橋という題名を付した一冊がある。すなわち、「挿絵」「記事」より成る日本橋協会編纂（宇井善八編輯・発行）『日本橋繁昌記』（日本橋区浜町・日本橋協会、一九一三年八月）一名、「日本橋区沿革史」である。巻頭に配された単色図版の中に、「日本橋」というものがあるが、これは、石造の日本橋である。その「橋梁」の中に（五四～五ページ）、「日本橋川に架し室町一丁目より通一丁目に通ず慶長見聞集の記す処によれば、慶長八年の創架にして日本国中の人衆り掛けたるより諸人一同に日本橋といひしともいひ、江戸名所図会には旭日東海を出づるを望む

を得るを以て称すと記せり、詳細は別項名所旧蹟欄参照」と見え、またその「名所旧蹟」に（一三三ページ）、「日本橋川に架せられ通一丁目より室町一丁目に通ず、（中略）爾來元和四年、万治元年、元禄十三年、正徳二年、宝暦十三年、安永二年、寛政八年、文化三年、文政六年、弘化二年、万延元年、明治五年、明治四十四年の十数回の架換を経たるもの即ち現在の橋なり、長二十八間、幅員十四間の石橋なり、左に江戸名所図会に載する所の一節を掲げん。（下略）」という記述が見られるが、残念ながら、今問題にしている「石標」についての記述は見られない。

【東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』第一冊などの本文記述の誤り】

以上のとおり、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋の「石標」の写真版や拓本の影印を収録した書物を発見することが出来た。

次に、この基礎的な史料である「石標」を基に、歴史的な叙述を行うわけであるが、その前に、現在に至るまでの研究成果を見ておく必要がある。なぜならば、新たに発見した事柄や事実であったとしても、既に先学諸賢によって指摘されていたならば、自分自身が新たな事柄であると思っても、それは既に周知の事柄となっているわけで、そのことを自分自身だけが知らなかったということになるからである。学術研究の最初に、研究史の整理という面倒な作業が置かれ、それを行わねば研究にならないことは言うまでもない（閲覧した文献については、注1参照）。

まず、先に調べた東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』第一冊（一九一六年九月）第二章「河川橋梁」第二節「橋梁」五（二ページ）の記述から、見て行くことにしよう。

記述内容は既に引いたところであり、その中には、日本橋架橋に要した費用、またその規模に関する記述もあり、それぞれに根拠が示されていないものの、これまで、こうした記述を行ったものが管見に触れないため、ひとまず信用するとしても、この中に引用されていた「石標」の文言、すなわち、「橋畔の南北に建てられし『日本ばし』と題する石標は、高さ五尺余、萩原秋巖の揮毫、広瀬群鶴の鐫刻したるものにして、其の裏面には『明治五年十二月二



十七日創立至六年五月三十一日成貨皆出於会所所蓄積」とあり」と言う記載は、現物の「石標」を確認して記述したものでないことが判明しよう。そして、続く「同橋の材料たる木材は、精良なる如鱗質の槻を用ひたり。其の後修繕相次ぎ、馬車鉄道・電車鉄道を乗せて三十有余年の久しきに耐えたり」という文章の前半部分は、萩原乙彦著・三木光斎画『（東京）開化繁昌誌』第一編（上之巻）「日本橋三条往来」に「但し見る組入の一新橋、桁梁柱他し木なく、揮て槻の如鱗木質にて、得難かるべき良材なるを、惜しむらくは青ペンキもて塗抹したれば、木質糲糊とし、婦女子は知らで過なん」とある記述と比較すると、その特徴である「青ペンキ」塗装がなされていた点の記述を欠くなど、充実した内容ではないことも判明しよう。

同様な点は、その後改めて編纂された東京市日本橋区役所編纂・刊『新修日本橋区史』下巻（一九三七年十月）第六章「交通」第二節「橋梁」（五六六ページ、五六九〜七〇ページ）にも踏襲され、「又橋畔の南北に『日本ばし』と題する石標を建てたがその高さは五尺余、萩原秋巖の揮毫、広瀬群鶴の鐫刻にかかりその裏面には、「明治五年十二月二十七日創立至六年五月三十一日成貨皆出於会所所蓄積」とあつた。則ちこの改架は宮繕会議所によつてなされたものであつて、費用は江戸時代の七分金によつたものである」というように、『日本橋区史』第一冊の記述のままの箇所があるものの、その費用に関する記述は、「日本橋区史」第一冊には見られぬ新たな指摘であることが理解されよう。

こうした『日本橋区史』第一冊や『新修日本橋区史』下巻の「石標」に関する記述が、いかなる材料に基づいたものかと言えば、それは、東京印刷株式会社編輯（編修）『（開橋記念）日本橋志』（東京印刷株式会社、一九二二年三月）「日本橋の変遷」（八七〜八ページ）である。

すなわち、「明治五年に架設して、現に昨年開橋せし新日本橋の前身は、同年十二月に工事に着手したものである、橋畔の南北に建て、あつた『日本ばし』と題する石標は、高さ五尺余萩原秋巖の揮毫、石工広瀬群鶴の鐫刻したもの

であつた、其裏面には『明治五年十二月廿七日創工至六年五月三十一日成、貨皆出於会所所蓄積』とあつて架橋費用は悉く、日本橋魚河岸の負担であつたと云へば、大に魚河岸の爲めに慢るに足るものであつた、猶同橋の材料たる木材は精良な槻の如鱗木質であつたさうで、修繕に修繕相ついだものとは云へ、馬車鉄道、電車鉄道に乗せて三十有余年間、急激な明治時代の繁雜多忙場裡にあつて、日本橋改築に着手するまでそれを維持し得た事は、明治五年度の架橋が実に丁寧親切を極めて居た為であつたらう」とあるのが、それである。

『日本橋区史』第一冊の記述は、「石標」の写真版を収めたものを別に出版しているにもかかわらず、本文の記述では、撮影して来た材料は用いられることなく、別の書物の記述を信頼し、それに依拠して綴ってしまったということになる。これが「孫引き」というもので、學術研究において最も戒めるべき事柄であることが理解されよう。

東京印刷株式会社編輯（編修）『開橋記念』日本橋志』が出版される以前に、数多く市中に出回つたものに、『風俗画報』臨時増刊「新撰東京名所図会」第二十五編・日本橋区之部其一がある（春陽堂、一九〇〇年四月）四九〇―五三三ページ「日本橋」のち、第二十五編より第二十八編まで、睦書房復刻、宮尾しげを監修『東京名所図会』日本橋区之部（一九六八年十月）所収。その中に、「（上略）弘化元辰年十一月掛替。同三年五月焼失跡掛替と見ゆ。現時のものは東京府統計書に其の年月を記せず。因て実地に就て檢せしに。橋畔に日本橋と大書深刻したる石標ありて其の背に明治五年十二月廿七日創工至六年五月三十一日成。貨皆出於会所所蓄積」と鐫銘せり。是に於て日本橋魚会所に於て、架設したることを知るを得たり」と記されており、これが、史料改竄の諸悪の根源であることが判明しよう。それも、実地に調査したという添え書きがあるから、迷惑千万な話である。

両書の記述の中に見えた架橋の費用に関する記述、すなわち、前者は「日本橋魚河岸の負担であつた」と記し、また後者に「是に於て日本橋魚会所に於て、架設したることを知るを得たり」と記されている件に関しては、その後、

東京市役所編纂・刊『東京市史外篇』第六・日本橋（一九三三年七月）第二章「日本橋の創架及変遷」五五ページ、五九ページ。のち鷹見安二郎著『東京市史外篇』日本橋と題して、聚海書林復刻（一九八八年二月）。滝沢武雄「東京市史外篇」成立の経緯」加藤貴『日本橋』覚書」を付す）において、「明治六年竣成の橋は、先に記した石標の文に『皆皆出於會議所蓄積』と見える如く會議所の支出によつてゐる。この會議所といふのは、松平定信にとつて創められた所の幕府時代の町会所の後身ともいふべきものであつて、蓄積とあるのは所謂七分積金に当る。町会所は明治五年に廃されその後會議所が設立され先の積立金を以て修路架橋等のことを専らとしてゐたのである。因みにこの石標の文の會議所を日本橋魚会所とつてゐる書があるがこれは誤である」と記し、その一方の誤りを指摘している。

その後刊行されたものに、日本橋区振興会編刊『日本橋由来記』（一九三六年四月）八〇九ページ、東京都中央区役所編刊『中央区史』下巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ（続き）」第九章「交通」第四節「橋梁」三八八―九一ページ「日本橋」単色図版「日本橋の変遷（明治六年改架の木橋）」（日本橋の変遷（現在）（同上））があり、その記述は、東京市役所編纂・刊『東京市史外篇』第六・日本橋に基づくものと思われ、前者は、「この改架に要したる総工費は一万二千九百六十七円であつて、南畔の石標に示されし通り、その全額が東京宮繕會議所より支出されてゐる」と記し、後者は、「この改架は宮繕會議所（のちに「東京會議所」と改称）によつてなされたものであつて、費用はいわゆる七分積金によつたものであることがうかがえる」と言った正確な記述を行っている。しかしながら、東京市役所編纂・刊『東京市史外篇』第六・日本橋の指摘を無視したのも二、三あり、魚河岸の費用で架橋されたという誤った理解は、今もって行われている。

なお町会所は、明治五（一八七〇）年壬申五月二十九日に廃止されたものの、由利公正東京府知事時代、市民の共有とするという趣旨の下、五十区の所有となり、六大区制が行われるに至り、六大区の共有として、第一大区の八丁堀に町会所を移したという。この間、明治五（一八七〇）年壬申八月、大蔵省井上大蔵大輔の内諭に基づき、宮繕會議所

を設け、商人の間からその掛りを選定した。そして旧町会所の財産を管理させるに際し、新政府御用商人中の東京在住者の間から主要人物を選ぶこととなり、東京市民に対する民費賦課によって行っていた道路・橋梁・水道などの修理については行き届き難いため、御堀浚いと隅田川に架かっている永代橋・大川橋・両国橋・新大橋の四大橋は、大蔵省が費用を出して修理し、その他の橋々については、民費によって修繕費を捻出すべきところではあるが、東京市民の困窮疲弊の状況が、維新以来、激しくなってきたため、民費より支出するならば、一層市民を苦しませる結果となることに鑑み、町会所積金をもって修繕を行うことにしたこと、そして、会議所事業の概要について触れた「東京府文書」(明治八年第三月)の中に、「日本橋築、明治五年十一月功ヲ創メ、翌六年五月落成」と見えることなどが、東京都編・刊都史紀要七『七分積金―その明治以降の展開』の中で、詳細に論述されている(一九六〇年三月。のち再刊、東京都公文書館編集都史紀要七『七分積金―その明治以降の展開』(東京都情報連絡室都政情報センター管理部情報公開課、一九九一年二月第二刷)第四章「宮繕会議所より東京会議所へ」一「宮繕会議所設立」(一一一―九ページ)第五章「会議所の事業」一「事業の概要」(一五〇―七ページ)。

なお、両国橋・永代橋・新大橋・吾妻橋の四橋の架換費のことなどについては、東京府編刊『東京府史』行政篇第四卷(一九三六年九月)「土木」第一「道路及橋梁」第六章「橋梁事業の沿革」二「明治時代の橋梁」にも見えるところである。

以上、簡単ではあるが、「石標」に関する記述内容の一端を見て来た。同様に、注記した先学諸賢の論著についても、それらを取り上げ、見て行く必要があるのであるが、紙面の関係から、それらについての検討は、すべて省略することとした。

【一八七三(明治六癸酉)年五月三十一日に竣工した日本橋の様子を伝える書物の一例】

以下、一八七三(明治六癸酉)年五月以降に出版された書物を見ながら、当時の様子をうかがうことにしよう。

まず最初に挙げるのは、一八八四(明治十七甲申)年六月に出版された岡部啓五郎編輯『東京名勝図会』である(丸家

善七、一八八四年六月。のち復刻の上、龍溪書舎編集部編近代日本地誌叢書・東京編②（龍溪書舎、一九九二年七月）所収。

その二丁から五丁にかけて、当時の様子、すなわち、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋について、出版された時点、すなわち、一八八四（明治十七甲申）年六月までの間に描かれたと判断される絵（日本橋）が見える。その本文では、この絵に描かれている木造の日本橋について、石造の橋と比較すれば、堅牢ではないものの、その壮麗の極みは類い稀なものであること、そして橋の上が平坦で、人道と車馬道の三道に分割するための欄干が設けられているという特徴、その経営費用は、市民の積金より支給されたものであることなどを記述し、これまで見て来た「石標」についても、正確な引用を行い、当時の様子を伝える文献的な位置を占めていると評価することが出来るよう。

収められている（日本橋）と題した絵が描かれた時期については、橋の上に、馬車鉄道の線路が敷設された形跡が見えないことより、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日より、一八八二（明治十五年）年六月二十二日に、東京馬車鉄道会社の新橋・日本橋間の線路が敷設されるまでの間、より時期を限定するならば、この線路敷設工事が開始される同年五月二十八日までの間における姿を描いたものという判断を下すことができよう。

一八八〇（明治十三己卯）年六月十五日、内務省は、申請されていた市街馬車鉄道の敷設を許可する旨を太政官に上申した。その後太政官において審査され、指令書が同年十一月二十四日、松田東京府知事より願人に下され、それに基づき、同年十二月二十八日、東京馬車鉄道会社の設立が認められた。その後、一八八二（明治十五年）年六月二十二日、第一区第一着手線路、すなわち、新橋・日本橋間、二・五キロメートルの線路敷設が竣工し、同年六月二十三日に試運転が行われたのち、同年六月二十五日より、乗客輸送が開始されたという歴史があり、わが国における市街鉄道時代の幕開けなどについては、既に多く論じられているところである（石井研堂著『明治事物起原』第九編「交通部」一

九四四年十一月・十二月増補改訂版を底本とした筑摩書房・ちくま学芸文庫判5（一九九七年九月）を使用。「馬車の始め」八「東京鉄道馬車の始め」  
（一七〇～二ページ）。中村舜二著『大東京』（大東京刊行会、一九二九年十月）第五章「交通運輸」第四節「軌道事業」二一五～六ページ「東京市  
最初の馬車鉄道」当時の馬鉄軌道は四呎六吋で、馬車は乗客定員二十四人乃至二十七人の小型のもので、粗曠の輓馬二頭をして牽引させ、日三四  
十台を運転して、日収三百円内外を算した」、東京市日本橋区役所編纂・刊『新修日本橋区史』下巻（一九三七年十月）第六章「交通」単色図版（東  
京名所 日本橋馬車鉄道図（三井文庫）、東京都中央区役所編刊『中央区史』下巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ（続き）」第九章  
「交通」第一節「東京の発展と交通機関」二「馬車と鉄道馬車」三二五～六ページ「鉄道馬車」単色図版（鉄道馬車）、東京都公文書館編都史紀要33  
『東京馬車鉄道』（東京都情報連絡室都政情報センター管理部、一九八九年三月初版。一九九〇年十月第二刷使用。白石弘之執筆）。

馬車鉄道の線路が敷設される以前の姿を伝える写真は、「はじめに」の中で掲げた野沢寛編『写真・東京の今昔』  
（再建社、一九五五年七月）にも見えるところであるが、それとは異なり、橋全体の規模が窺える写真、橋の北詰から撮影  
したものがあ。それは、石黒敬章編『（総天然色写真版）なつかしき東京―石黒コレクション』（講談社カルチャーブッ  
クス42、一九九二年二月）「日本橋・三越」九ページ単色図版）に収められた単色図版（木橋時代の日本橋から銀座をのぞむ。当  
時、人道と車道に分かれていた。橋向こうの洋風建築は電信局。明治初年）、玉井哲雄編集・石黒敬章企画『よみが  
える明治の東京―東京十五区写真集』（角川書店、一九九二年三月）「日本橋区―擬洋風建築と土蔵造商家」九四ページ単色図版）に収  
められた単色図版（日本橋北詰から南西を望む（この橋は、明治六（一八七三）の架け替えによりできた橋であり、幅七間ほどを中央  
の車馬道、左右の歩道に分けている。写真奥へと通じる町並みは通町沿いのもので、街道は京橋・新橋を経て東海道へと通じる））という写真で  
ある。橋の北詰西側を南方向へ歩く人、そしてその手前に立ち止まっている人が写っていることより、橋の幅をある  
程度限定し得る材料となろう（橋の幅をうかがうことの出来る材料として、人道と車道の間設けられていた欄干を除去した時期の写真があ  
る。高橋順二編『東京名所の百年』（東京史蹟研究会、一九六七年三月）五ページ単色図版（明治二十八年 北詰から通町方面 前方時計塔は吉沢とい

う時計店」。高橋順二氏は、「明治六年の架けかえ長さ五一メートル幅八メートル弱、この上を人道、車道を区別して、文明開化の馬車が走り、鉄道馬車が走り、やがて電車が渡ったのである」という解説を付しておられる。

最後の木造架橋工事が行われた日本橋の規模については、明治五（一八七〇）年壬申四月、各府県の地図ならびに地誌の編纂を企図し、国内各地の沿革現勢を録上させることによって、当時の日本の国勢を明らかにしようという陸軍省の要求に応じた東京府が、府下一円にわたって調査し編纂した地誌『東京府志料』、それを翻刻した東京都（都政史料館）編・刊『東京府志料』1（一九五九年三月）巻之五・河渠志「日本橋川筋」七七ページ「橋梁」の中に、「日本橋 室町一丁目ヨリ通一丁目へ架ス長二十九間幅七間ナリ」と見えるのが、管見に触れた橋の規模に関する最も古い記録である。

これに記載された規模に近い橋の幅を感じる一枚の写真が、先の玉井哲雄編集・石黒敬章企画『よみがえる明治の東京―東京十五区写真集』に収められ、ほぼ同様な時期の絵画としては、鈴木重三「浮世絵の日本橋」（駿河不動産株式会社編刊『日本橋駿河町由来記』一九六七年三月）所収（四一七―三四ページ）の中に見える小林清親の絵画作品「日本橋夜」を挙げる事が出来よう（一八八一〈明治十四辛巳〉年。福田熊次郎版。単色図版〔日本橋夜（小林清親画）〕〔同上書四五―五五ページ〕。なお小林清親の作品については、高橋順二編『東京名所の百年』〈東京史蹟研究会、一九六七年三月〉一四九―五〇ページ「清親と安治」、墨田区区长室〈広報広聴担当〉編刊『墨田人物誌』〈一九八二年三月〉「明治・大正・昭和篇」六二―四ページ「小林清親〈こばやしきよちか・一八四七―一九一五〉開化の浮世画師、隅田川沿いの風情を『東京名所図』に」、草刈順著『一九〇〇年東京べんていめんと』〈冬芽社、一九八九年三月〉「日本橋べんていめんと」も参照のこと。

一八九〇（明治二十三庚寅）年三月に出版された上田維曉（文斎）著『東京名所独案内』の中に、馬車鉄道の線路が敷設された絵（日本橋之景）が見えている（嵩山堂、一八九〇年三月）八二ページ。のち復刻の上、龍溪書舎編集部編近代日本地誌叢書・東京編②〈龍溪書舎、一九九二年七月〉所収。この絵には、馬車鉄道線路が描かれていることより、一八八二（明治十五年壬午）

年六月に東京馬車鉄道会社の新橋・日本橋間の線路が敷設された後、書物が出版される一八九〇（明治二十三庚寅）年三月以前のある時期に描かれたものと判断されよう。この時期には既に橋の欄干が取り除かれ、その欄干の基礎部分が見えるとともに、中央部分に線路が複線で敷設されていることが窺える。人力車が走っている様子も描かれ、それが道の中央を左側通行していることは、馬車鉄道の場合と同様である（『東京名勝図会』の絵では、人力車は左右関係なく通行している。いずれの絵にも、橋の袂に、露店商が出ている様子は見られないが、東京市日本橋区役所編纂・刊『新修日本橋区史』下巻（一九三七年十月）第六章「交通」単色図版（明治初年の日本橋附近（原図は大熊喜邦博士の所蔵するところにして明治初年の日本橋附近の状況を窺ふことが出来、ひいては江戸時代の面影も想像するに足りる。橋南高札場附近に物売屋台、人力車等の雑沓せる状況或は家屋の構造等興味深きものがある））では、露店商が出ている様子をうかがうことができる）。

一八九二（明治二十五壬辰）年九月に出版された相澤朮著『東京名所鑑』（東崖堂、一八九二年九月。のち復刻の上、龍溪書舎編集部編近代日本地誌叢書・東京編③〈龍溪書舎、一九九二年七月〉所収）には、佐佐木信綱の序が見られ、その五六丁から五七丁に「日本橋」のことが記され、その間に、「日本橋」と題した絵が挟まれている。

この絵に描かれている橋の様子は、幾分反り橋のように見え、また日本橋川より見た様子を描いたものであるため、その中央というより、橋の全体を車道として用い、そこを馬車鉄道を中心として通行しているかのような印象を与えている絵となっている。ここに、線路敷設に伴い、人道（のちの歩道）などは二の次というわが国近代社会から現代社会に至るまで継承されて来た「交通機関優先政策」、道路整備の原型を見出すことが出来よう。この絵も、線路の敷設された一八八二（明治十五年）年六月二十二日以降、書物が出版される以前までの間に描かれたものということになるろう。

以上、管見に触れた絵や写真版より、最後の木造「日本橋」の様子を見た。このように、絵や写真版が、文字で示



された以上の内容を伝えてくれることも多々あり、歴史的な事実について、丹念に調べ上げていくならば、右に記述した以上の描写が出来ることは言うまでもない。ただし、出版年月が古いからと言って、それを鵜呑みにすると、思わぬ落とし穴に遭遇すること、すなわち、従来、最後の木造の架橋工事が竣工した日本橋の最も古い絵と考えられて来た絵に対し、それが反り橋で描かれていることを根拠とし、当時の姿をそのまま伝えるものではないことを指摘したように、注意を払わねばならぬ時もある。

また一八九三（明治二十六年）年四月一日に行われた日本橋橋上の交通量調査の記録が、明治二十六年四月五日『郵便報知新聞』に掲載され、それに関しては、既に、野口孝一氏の紹介があるので、ここでは省略した（同「日本橋橋上の賑わい―明治二十六年四月一日」（東京都中央区企画部広報課編刊『中央区区内散歩―史跡と歴史を訪ねて』第四集（一九九八年三月）所収（二三七―三三二ページ）単色図版（日本橋の新年〈『風俗画報』より〉）（日本橋之景〈『東京名所指南』より〉）。なお『郵便報知新聞』は明治壬申六月・第一号を創刊〈新貨三銭〉。その第一号の記事については、『新聞集成』明治編年史編纂会・中山泰昌編著『新聞集成』明治編年史『第一巻・維新大変革期（明治編年史頒布会、一九三四年十二月初版。一九六五年九月再版使用）を参照のこと）。

## 第二節 一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の日本橋の規模とその架橋の理由をめぐって

本節では、一九八〇年代より疑問を抱いていた点について、現時点における知見を交えながら、見て行くことにしたい。

まず、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋の規模についてである。これにはどう言う訳か、三説あり、いまだ確定を見ているとは言えない。

先に記した東京都（都政史料館）編・刊『東京府志料』1（一九五九年三月）巻之五・河渠志「日本橋川筋」七七ページ「橋梁」に、「日本橋 室町一丁目ヨリ通一丁目へ架ス長二十九間幅七間ナリ」とあるのが、管見に触れた最も古い記録を翻刻したものである。

しかしながら、石造の日本橋架橋の主任技師であった米元晋一氏が執筆された「新日本橋の架換」（安藤安編輯『日本橋紀年誌』〈日本橋紀年誌発行所、一九二一年四月〉所収）の中に、「明治五年五月架け換、此時長さ二十八間幅六間橋坪百六十八坪」という規模であったことが示されて以来、東京市日本橋区役所編纂・刊『日本橋区史』第一冊（一九二六年九月）第二章「河川橋梁」第二節「橋梁」四九〇～五〇〇ページ「日本橋」、東京市役所編纂・刊『東京市外篇』第六・日本橋（一九三二年七月）第二章「日本橋の創架及変遷」「改架修復事蹟」五四～五八ページ「長さ二十八間、幅六間、橋坪百六十八坪あり」、日本橋区振興会編刊『日本橋由来記』（一九三六年四月）八〇～八二ページ「江戸人の姿を象徴せしが如き高欄擬宝珠の日本橋も、江戸が東京と改称されて間もない明治六年の改架に於て、その優美なりし姿を洋風にかへてゐる。当時この橋の長さ二十八間、幅六間で、その橋坪は百六十八坪を数へ、坪数に於ては前述の元和四年当時の橋にやゝ勝つてをるが、長さに於ては約十間の短縮をみてゐる」、東京市日本橋区役所編纂・刊『新修日本橋区史』下巻（一九三七年十月）第六章「交通」第二節「橋梁」五六六、五六七～七〇ページ）、東京都中央区役所編刊『中央区史』下巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ（続き）」第九章「交通」第四節「橋梁」三八八～三九一ページ「日本橋」へと継承され、その根拠は示されていないものの、通常、最後の木造架橋工事が施行された日本橋の規模を示す理解となっているかのよう  
な印象を与えている。

ところが、一九八〇年代の後半の時期に購入した中央区教育委員会社会教育課文化係編『中央区の文化財』（三）橋梁（中央区教育委員会、一九七七年十二月初版。一九八五年三月増刷版使用）三六〇～四〇〇ページ）の中で、米元晋一「新日本橋の架換」（前掲）、東京市役所編纂・刊『東京市外篇』第六・日本橋（前掲）などが示した橋の規模については一切触れられず、

「長さ二九間（五二・七メートル）、幅七間（二二・七メートル）とも、長さ二八間（五〇・九メートル）、幅七間七分（二三・九メートル）ともいわれ」といった二説があることが紹介された。当然、その記述には根拠があると思われるものの、それが示されていないため、また当時はそれを調べる作業を行うことなく、私自身のノートは未解決のままになっていた。今その根拠を求めて見ると、次のようになる。すなわち、前者の橋の規模の根拠は、先に示したとおりの『東京府志料』1、後者のそれは、東京市編纂『東京案内』上巻（東京市役所市史編纂係刊・裳華房発売、一九〇七年四月。のち明治文献復刻、一九七四年三月。朝倉治彦「東京案内」を付す）「市街記」三「日本橋区」△三「交通」五八三ページ「明治五年の架換を経たるもの、即ち今の橋（現に架換の設計中なり）にして、長廿八間幅七間七分の木橋也」、戸川残花口述『江戸史蹟』（内外出版協会、一九一二年四月。のち復刻の上、龍溪書舎編集部編近代日本地誌叢書・東京編⑧〈龍溪書舎、一九九二年七月〉所収。四六ページ「一番最後の明治五年の木橋は、長さ二八間、幅七間七分、慶長の頃に較べると河幅が余程狭くなり、従って橋の長さも縮まったが、幅だけは広くなつて居る」）の中に記されているところに求めることができよう。

中央区の出版物でも同様ではなく、最近公刊された東京都中央区教育委員会社会教育課文化係編・刊中央区文化財調査報告書第五集『中央区の橋梁・橋詰広場―中央区近代橋梁調査』（一九九八年三月）第二編「台帳編」一七二―三ページ「日本橋」、第三編「資料編」3「橋梁年表―明治・大正期震災前の東京市」三二三―三三ページ）をひもとくと、今度は、先の『中央区の文化財』（三）橋梁が記述する二説は採用されず、別の記載、すなわち、「橋名―日本橋、竣工年月―一八七三（明治六）年（引用者注、五月△三十一日）、材料―W（引用者注、「木」を略号で示したものの）、橋長―五〇・七メートル、幅―一〇・九メートル、河川名―日本橋川、備考―欧風木桁橋」といった記述がなされているのである。このメートル法に基づいた表示は、「長さ二十八間、幅六間」という記載をする米元晋一「新日本橋の架換」（前掲）東京市役所編纂・刊『東京市外篇』第六・日本橋（前掲）などが示した橋の規模が正しいという判断の下で、記されたものなのであろうか（また、この

時期の日本橋については、竣工年月が明瞭であるものの、その「月」の記載がなされておらず、不親切なものとなっており、また記載事項に関する根拠が明記されていないようでは、「資料編」とは言えないであろうと感ずるのは、私だけではあるまい。

不思議なことに、その第二編「台帳編」(二七二ページ)では、「明治三年、維新政府は橋を改架したが、これは五年四月の銀座大火のため、焼落した」と記しながら、第三編「資料編」において、これに対応した「明治三年」の改架については一切記載がないのである。

〔明治〕五年四月の銀座大火」という記載は、どうも太陽曆に基づいた表示のようである。元号を用いて表示するのであれば、当時使用されていた太陰曆に基づいて、「明治五年二月(二十六日)」という記述をしなければならぬ。

この第二編「台帳編」一七二ページは、石川悌二著『東京の橋―生きている江戸の歴史』(新人物往来社、一九七七年六月)「日本橋川筋」二二〇〜九ページ「日本橋」に見えるところの「明治維新後に新しい政府の手で同三年に日本橋を改架したが、これは同五年四月の銀座大火のために焼落し、災後、新橋から銀座通りを煉瓦街とする計画が実施されるにあたり、日本橋も乗合馬車や人力車が往復するために車道と人道とを区別して西洋風にしたがい反りをなくし、欄干の擬宝珠も廃止、男柱と両袖は石造としたが橋脚橋桁は木で、それに青ペンキを塗ったものであった」という説に依拠したものであるか。この石川悌二氏の説に基づくならば、一八七三(明治六癸酉)年五月三十一日に竣工した日本橋の架橋の理由は、銀座大火のために焼け落ち、新たに架橋される必要が生じたということになる。

しかしながらこの点に関する素朴な疑問、すなわち、「銀座大火」と称されている明治五(一八七〇)年壬申二月二十六日の火災の<sup>(9)</sup>範囲は、日本橋という橋のあった場所まで及んでいたのだろうか。と言うのは、東京市役所編纂・

刊『東京市史稿』変災篇第五(一九一七年八月)東京市地史各記十二変災篇第五、第二節「本記」帝都時代火災九九四〜一〇〇六ページ、五年(明治、紀元二五三三年)条)明治五年壬申二月二十六日条が示すところの「祝田町(市内麴町区)失火、延焼築地(市内京

橋区）ニ及ヒ、被害二千九百余戸ニ達ス」という綱文とその関係諸史料の中に、明治五（一八七〇）年壬申二月二十六日の火災に関する「麴町区役所答申」「京橋区役所答申」は見えるものの、そこには、日本橋区役所答申がないからである。この点は、どのように考えたらよいのであろうか。火災が日本橋区にまで及ばなかったため、日本橋区からの答申が出されなかったのではなからうか。それゆえ、日本橋が焼け落ちたという根拠は不明という判断を下すに至り、幕末からの橋は、焼失していないのではなからうかという考えに変わりはしない。

火災による改架であるならば、東京市役所編纂・刊『東京市史稿』変災篇第五（同上、一〇〇四～五ページ）に見える「明治五（一八七〇）年壬申四月二十四日、本石町二丁目七番地より出火し、本石町二丁目、金吹町、本石町十軒店、本町二丁目、本革屋町、室町三丁目の合計六箇町、全焼家屋二百二十六戸に及んだ火災の方が、日本橋という橋には近いものの、この火災の及んだ範囲について、地図を用いて見るならば、日本橋が焼失していないことも判明しよう（最近、東京都中央区教育委員会・東京都中央区京橋図書館編刊『中央区沿革図集（日本橋篇）』（一九九五年三月）と題した優れた地図集が出版された）。I 地図の部―中央区の地下の有様・武州豊嶋郡江戸庄図・延宝七年「江戸方角安見図鑑」御府内沿革図書・寛保沽券図 附横山町・村松町沽券図・改訂「江戸之下町復元図」・大区小区時代の日本橋・明治十七年 参謀本部陸軍部測量局 東京五千分一図・明治末期の日本橋地区・大正元年 日本橋区地籍地図・大正十二年 関東大震災火流図・帝都復興事業による変化・昭和七（一）十一年の火保図・昭和二十年代の火保図・昭和三十七年頃の（日本橋地区）・日本橋よろず地区・中央区現状図。II 解説の部）。

## おわりに

以上、「歩きながら調べ、調べながらまた歩く」という私の歴史学習の方法論の基礎的な部分を叙述するため、そ

の題材として設定した「一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋」の架橋に関する基礎的な史料である。「石標」の写真版や拓本の影印を収めた書物を探し出す方法を具体的に示し、史料として用いることのできる当時の「石標」の写真版や拓本の影印を収録したものをを用いるのが、史学の常道に適用ものであることを述べるとともに、その他幾つかの材料を提示し、石造日本橋の架橋以前の光景を見ながら、併せて、一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日に竣工した日本橋の規模や架橋の理由についてのこれまでの見方に対する疑問を提示し、それに対する私見を述べた。

日本橋の歴史上、最後となった木造の架橋工事が行われた一八七三（明治六癸酉）年五月三十一日竣工の日本橋は、営繕会議所の積金を利用するしか術がないという財政的な状況下における架橋工事であり、江戸時代以来の伝統を幾分尊重しつつも、それまでの反り橋という構造を捨てるという決断を下した。それは時代の交通の流れ、すなわち、日本橋川を利用した水上交通から陸上を中心とした交通機関への転換を示すものであり、人力車や馬車などの往来を考慮したため、従前の橋の幅を拡張する結果となった。しかしながら、最後の木造日本橋架橋当初は、そこに、人道を左右に設けるといった「三条」の道筋を設定し、区分けをするための欄干を付設し、歩行者の通行も十分配慮した。この事実、外人技師、すなわちフロランの「東京府下ノ道路、総テ狹隘ニシテ街区モ亦タ錯雑セリ。（中略）行路ヲ三二分ち中一条を馬車道トシ、左右ノ両道牛馬及ヒ車ヲ入ヲ禁スヘシ」（東京都編刊『東京市史稿』市街篇第五十二～一九六二年三月）明治五年壬申三月十三日条〈焼失跡地買収、煉瓦石建築方法開示〉「煉瓦石建築方法開示事蹟」一「外人技師意見」（八八三ページ）という市街地における道路幅拡張意見に基づくものと思われ、それは、新たな都の市街地造成計画に採用され、銀座煉瓦街の建設と同様の道路整備に基づく計画の実施が、この日本橋の架橋にもうかがえるのである。この歩道設置という事実は、お雇い外国人の提言に基づいたもので、その費用の出所が民費にあることと深い関係があるとは、残念ながら

言えない。

次第に交通量が増え、馬車鉄道の線路が敷設される時期を迎えると、それまでの「三条」に区画した欄干を取り外した。この事實は、その後のわが国の伝統的な道路建設の先駆けとなり、それは、一九六〇年代から一九七〇年代にかけて、全国各地に設けられた幅の狭い舗装道路建設に至るまで継続された。人道（のちの歩道）などは二の次という車道優先道路の横行がそれである。木造日本橋が架けられた当時における「三条」の区画は、幅は狭いものの、近年、それまでの車道優先道路、狭い歩道を改め、続々と建設されている三〇メートル道路における歩道と同様、人にも配慮した道路という側面を有するものであった。この事實は、わが国の近代国家誕生期における歴史の一駒として、忘れてはならない事柄の一つであろう。

限られた紙面ということもあり、省略した部分が多々ある。それらに関しては、別に、現代における日本橋界限を歩きながら、「歩きながら調べる日本史学方法論」に基づいた記述を行ったものを公表する予定であるので、併せて参照いただければ幸いである。

#### 注

(1) 管見に触れた戦後公刊された論著のうち、明治時代の日本橋の架橋に触れたものを中心として以下に掲げておく。掲げた論著のうち、石標などの基本的な史料を孫引きし、誤った記述を行ったもの、また本文の記述についても、同様の方法で行ったものなどが含まれているが、それらについて一々を記す形を採らなかつた。

- ・木村毅編『東京案内記』（黄土社書店、一九五一年九月）第三篇「生活と娯楽」一二七～三三二ページ「日本橋と京橋」。
- ・野田宇太郎著『新東京文学散歩』増補訂正版（角川書店・角川文庫384、一九五二年三月）その二「日本橋・両国・浅草・深川・築地」。

・窪田明治著『東京をさぐる』（新公論社、一九五二年八月）第二篇「東京の各区（中央区）」第一章「中央区の歴史」第

三章「橋と中央区」。

・矢田挿雲著『江戸から東京へ』第一巻（再建社、一九五三年五月）「日本橋区〈中央区〉」四四〇五ページ「日本橋の高札」。のち、中公文庫版「H4」「江戸から東京へ」第一巻（麴町・神田・日本橋・京橋・本郷・下谷）として出版（〈中央公論社・中公文庫、一九七五年三月。朝倉治彦解説〉八五〇九ページ「日本橋の高札」単色図版〔明治四年頃の、日本橋川の江戸橋と西堀留川の荒布橋〈正面〉〕〔明治四年頃の日本橋〕〔明治三十年代、日本橋通りを走る上野行鉄道馬車〕。さらに、中公文庫版「S810」「新版」江戸から東京へ』第一巻（麴町・神田・日本橋・京橋・本郷・下谷）として出版（〈中央公論社・中公文庫、一九九八年九月〉一〇六〇二二ページ「日本橋の高札」単色図版〔日本橋にある日本橋道路元標〕〔日本橋の高札〈江戸名所図会〉天保五年―一八三四―七年〕〔日本橋付近絵図〈文久三年―一八六三―再刻〉〔靈岸島八丁堀日本橋南絵図〕尾張屋板〕〔日本橋〈アンベール〉幕末日本図絵〕一八七〇年〕〔明治三十年代後半の日本橋〕〔明治四十四年（一九一一）に竣工した日本橋〈昭和四年頃〉〕〔徳川慶喜筆「日本橋」〈原本東京都公文書館蔵〉〕。

・高橋碩一編『東京歴史散歩』（河出書房新社・河出新書―教養269、一九五八年三月）「日本橋から銀座まで」〈中井信彦・原島陽一〉。

・東京都中央区役所編刊『中央区史』上巻（一九五八年十二月）巻頭図版〔日本橋雪の曙〈木曾街道続ノ巻 池田英泉画、日比谷図書館所蔵〉〕〔日本橋〈絵本三都名所一覽 上野図書館所蔵〉〕〔日本橋之図〈秋元家所蔵東海道絵巻之内〉〕第二編「近世」第二節「下町の築成」一〇一ページ。第七章「交通」第四節「橋梁」四五〇―三三ページ「日本橋」単色図版〔菱川師宣画く日本ばし〈延宝五年頃刊行、江戸雀所載〉〕〔日本橋の擬宝珠と銘の拓本〈通一丁目黒江屋蔵〉万治元戊戌年九月吉日〕〔外国人のみた日本橋〈Humbert〉〕第十七章「変災」第一節「火災」第二節「震災」。

・東京都中央区役所編刊『中央区史』中巻（一九五八年十二月）巻頭図版〔明治初年の日本橋〕〔明治初年の魚河岸〕〔日本橋南詰から北方を望む〕〔日本ばし〈織田一麿画〉〕第三編「明治から現代へ」第一章「市街とその変遷」第六節「両国・日本橋・人形町・その他」一九五―二〇四ページ「日本橋界限」単色図版〔日本橋の道路元標〕〔明治初年の日本橋〕。

・東京都中央区役所編刊『中央区史』下巻（一九五八年十二月）第三編「明治から現代へ〈続き〉」第九章「交通」第三節「道路」〈三六二―三七九ページ〉第四節「橋梁」〈三七九―四〇一ページ〉内、三八八―九一ページ「日本橋」単色図版〔日本橋の変遷〈明治六年改架の木橋〉〕〔現在〕〔現在〕。

以下の注記は投稿枚数超過につき、これを削除する。